

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 28 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531103

研究課題名(和文) 芸術教育による感性に働きかけるESDの構築～代替案の思考能力の育成～

研究課題名(英文) ESD through Art Education -Encouraging the alternative ways of thinking by sensibility-

研究代表者

神野 真吾 (JINNO, Shingo)

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：90431733

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、感性が概念的な認識の手前で、その多様なあり方を想像できるという認知科学、美学の基本的な理解を前提とし、音楽や美術の活動を通して、対象へのオルタナティブな視点を持つことが育まれ、それが日常の思考様式から離れることを可能にし、自分自身で対象に意味を付与し、主体的な行動を選択することへと至るという仮説をもって研究に取り組んだ。持続的開発のための教育(ESD)の一つの方法として芸術教育を位置づけるという本研究の目的は、学校教育における児童生徒への効果、指導を行う学校教員への研修における効果、そして市民向けの公開ワークショップでの効果において、それぞれ一定の成果を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：Our recognition of our world is generally consist of rational understanding through concepts and categories. Other-hands, the sensibility is treated as a secondary ability. But we think the sensibility can renovate our old recognition of the world and it can also offer alternative ways of thinking.

When we stand on this ground, Art education can be a positive possibility of ESD(education for sustainable development).

We held some workshops for school children, teachers and ordinary citizen. They acquire the ability to think alternatively to some extent.

研究分野：芸術学

キーワード：持続的開発のための教育 感性教育 創造性教育 芸術教育 オルタナティブ・シンキング ワークショップ 協働性 デザイン・シンキング

1. 研究開始当初の背景

震災、原発、資源、環境、格差、超高齢化など、社会の変化は恐ろしいほどのスピードで進み、諸課題に新たな知をもって当たらねばならない事態がある。ESD(持続的開発のための教育)はそうした取り組みの内の一つだが、その多くは、環境問題などに理性的な枠組みからアプローチし、その結果として考えられた合理的な行動を多くの人たちに撮らせようとするものに偏りがちである。しかし、概念的な認識から行動を要請することが社会の主流ではあるが、主体的に自分の意思で行動選択することが、持続性や、状況の変化への柔軟な対応につながり、それを可能にするのが「感じる」ことを出発点とした新たな知性の確立が求められるのではないか。芸術は感性に訴えかける基本構造を持ち、芸術教育はその構造を活かし、新たな知のありように貢献することが可能になるはず。

2. 研究の目的

感性を通じた教育は、その効果測定が難しい。また、感じることで体が目的とされれば、芸術体験をすればそれで良いということになってしまう。そこで本研究では次の目的を設定した。

- (1)効果測定の指標を設定する。
- (2)感性と認識の関係性についての理論研究から、教育プログラムの構造を構築する
- (3)プログラムを、学校教育の場で、教員研修の場で、市民の学習の場でそれぞれ展開し、効果の評価を行う。

3. 研究の方法

研究の方法としては、文献を中心とした理論研究・構築と、インタビュー、質問紙調査、参与観察を用いた。

2-(1)の指標に関しては、芸術家や芸術教育の専門家への聞き取り調査、およびイギリスを中心とした芸術プログラムの評価のための指標、高校生への質問紙調査から、本研究での評価のための指標作りに取り組んだ。

2-(2)の理論構築に関しては、スタンフォード大学の d-school でのデザイン思考の考えや、チクセントミハイらの心理学の領域における創造性の捉え方、そして、芸術家の創造のプロセスをもとに、「感じることからアクションへのサイクル」というプロセスモデルを設定し、それをデザイン原則として教育プログラムの設定を行った。

2-(3)については、教科、あるいはジャンルの特性を活かした教育内容のプログラムを作成し、児童・生徒、教員、一般市民を対象に実施をした。本研究で設定した指標をもとに質問紙を作成し、それぞれのプログラムで質問紙調査を実施した。

4. 研究成果

(1)評価の指標：次の三つの要素が重要だと

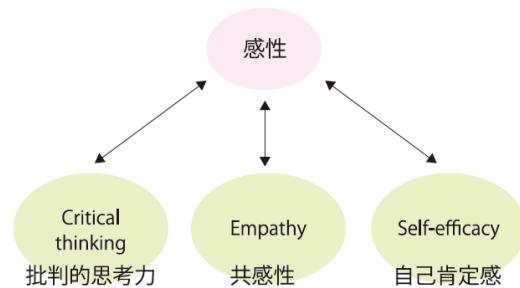
考えらる。

様々な場面において、時に常識を疑い、五感で感じたり、異なる角度から眺めたりしながら、別の可能性やあり方を考えたりする

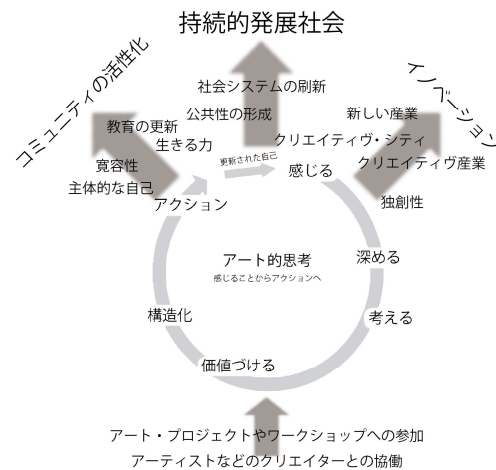
自分の抱いたこだわりを探索・追求する。達成のために努力する意欲や意思をもつ。

人それぞれの感じ方の違い、価値観の多様性を知る

これらは、「批判的思考力」、「共感性」、「自己肯定感」などといった構成概念と関連があることが想定される。



(2)理論構築(創造的思考プロセスの理論化)主に美学領域における、理性的認識と感性的認識の理論を参照しつつ、感性の位置づけや性質を検証し、現代におけるその活用の可能性を探った結果、感じることから行動までの創造的プロセスのモデルを構築することが出来た。



(3)プログラムの確立と評価

創造的プロセスのモデルに基づいて、いくつかの教育プログラムを研究メンバーの専門を活かしつつ構築することができた。プログラム参加者は、質問紙調査の結果や参与観察、インタビューなどから、自分の環境への意識が有意に変化していることがわかった。「つくる」活動と「鑑賞する」活動でも同様の効果が得られている。また、このモデルは、従来から行われていた授業などのチェックにも有効であるという指摘もなされ、研究メンバーが指導する大学院生の研究の中でも、授

業案が創造的なサイクルが生じる構造になっているのかを検証する上でも有効であることが確認されている。

課題としては、芸術の従来の「高級な」、「難解な」イメージを壊すことが大事になるが、そのための方法が確立されていないこと。はっきりしているのは、経験を通してしか新たな認識を構築することは出来ないため、芸術教育に十分な時間を確保することが必須となること。そして、授業者が芸術の捉え方を変えることが出来なければ、こうした成果を活かした実践は取り込まれず、旧来の芸術観に則った指導が繰り返され、社会における芸術教育の可能性は実現されないままになってしまう。本研究の、各対象（児童・生徒、教員、市民）に対するこうした芸術教育を制度化していくことが次なる課題となる。

小学校での実践

- 作った写真を見せ合う授業で「人の感じ方」を学ぶことができた。いつもは気づかないところを見ると、とてもおもしろかった。
- 図工室のものを直した授業が、これまでずっとかよっていたのはじめて発見した事があったととても楽しかった。人によって感じる事が違うことを授業全体で学ぶことができました。また感じる事がとても大切だということも学ぶことができました。
- 図工室ではあまりふだん見なかった視点であるというのがある！としり生活が楽しくなった。案外自由に個性を生かしてのしりかった。
- 案外自分の表現で書くのがおもしろかったです。また、すこし目をむければ近くにあるものも面白く感じたり不思議に感じたりすることができたことがわかった。

中学校での実践

- 普段の生活の中でも、視野を広げて周りの光景をもっと疑問・感動を抱くようになると、感性は磨かれると思います。授業前と後では、同じものを見ても、感じ方が違うと思います。そうやって感性が磨かれればいいです。
- 人の気持ちをもっと考えようと思った。
- 今回は、「感性」というテーマで普段はしないことをたくさん追究できて面白かった。
- 身の回りの面白いことを発見できた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 11 件)

神野真吾、見ることの学び、異心地、査読無、1号、2015、18-21

神野真吾、アートと非アートの境界で、WiCANドキュメント2015、査読無、12巻、2015、4-5

中山節子、貧困、格差・セーフティネットの諸問題を家庭科教育でどう捉えるか、査読有、大学家庭科研究、35号、2014、19-24

伊藤葉子、中山節子、教員養成におけるESD指向上のための教材開発、査読無、千葉大学教育学部紀要、62号、2014、177-182

神野真吾、文化という語から図工・美術教育を考える、造形ジャーナル、査読無、583号、2013、2-3

中山節子、現代社会における貧困問題に焦点化した高等学校家庭科実践の意義、査読有、生活経営学研究、48巻、2013、40-50

神野真吾、空間をめぐる学び 戸倉上山田中学校の廊下アートセンター、査読無、建築雑誌、vol.128 no.1645、2013、48-48

伊藤葉子、首藤敏元、倉持清美、大竹美登利、松葉口玲子、現代的教育課題にこたえるリサーチメソッドを学ぶ教育プログラムの

開発、査読無、千葉大学教育学部紀要、61号、2013、115-122

中山節子、伊藤葉子、古重奈央、鎌野育代、真田知恵子、岩田美保、ESDに関する発達段階の基礎的研究 写真投影法を用いたESDに関する発達段階の基礎的研究、査読無、千葉大学教育学部紀要、61号、2013、203-210

伊藤葉子、中山節子、岩田美保、PIP-Model for pre-service teachers in the practices of ESD、International Journal of Home Economics、査読有、5巻2号、2013、178-190

神野真吾、実際の教科へ～個性・創造性の捉え直し～、教育研究「特集 芸術教育はなぜ必要か」、査読無、67巻10号、2012、22-25

〔学会発表〕(計 12 件)

神野真吾、山中悠、美術鑑賞を通してこそ可能な学びとは、美術科教育学会、上越教育大学(新潟県)、2015年3月28日

神野真吾、美術/アートの側から 美術教育を考える、美術科教育学会 地区会(招待講演)、CCAA アートプラザ(東京都)、2014年12月20日

神野真吾、アート教育によるクリエイティブ・コミュニティ、日本アートマネジメント学会(招待講演)、実践女子大学(東京都)、2014年11月29日

神野真吾、子どもと教育 感じることからアクションへ、森美術館 ゴー・ビトゥインズ展(招待講演)、森美術館(東京都港区)、2014年07月26日

神野真吾、総合大学における普通教育としてのアート実践、美術科教育学会、奈良教育大学(奈良県)、2014年03月21日

神野真吾、地域とアートと研究、社会システム芸術とその変容(コロキウム)、山口国際芸術センター(山口県)、2013年11月17日

伊藤葉子、中山節子、鎌野育代、ESD Curriculum focusing on Caring Education for K-12、17th Biennial International Congress of ARAHE、National Institute of Education, Singapore、2013年07月16日

伊藤葉子、中山節子、A new approach to ESD in collaboration with the subjects of home economics, arts and music、17th Biennial International Congress of ARAHE、National Institute of Education, Singapore、2013年07月16日

伊藤葉子、中山節子、家庭科のESDのための現職教員向け教育プログラムの開発、日本家庭科教育学会、弘前大学(青森県)、2013年06月30日

縣 拓充、神野真吾、笹本博紀、美術館での鑑賞体験の教育効果についての測定、美術科教育学会、島根大学(島根県)、2013年03月28日

Setsuko NAKAYAMA, Yoko ITO, Development of ESD Model by the method

of PIP for K-12 and university、
International Federation of Home
Economics World Congress、Melbourne
Convention Centre (シドニー・オーストラ
リア)、2012年07月16日~07月21日

中山節子、伊藤葉子、家庭科におけるESD
指導の向上を目指すPIPメソッドプログラ
ム開発の実証的研究、日本家庭科教育学会大
会、東京学芸大学(東京都)、2012年06月
30日~07月01日

〔図書〕(計5件)

神野真吾ほか、異心地、千葉アートネット
ワーク・プロジェクト・千葉市民ギャラ
リー・いなげ、2015、24

神野真吾ほか、千葉アートネットワーク・
プロジェクト・千葉市美術館、WiCAN Document
2014、2015、102

神野真吾ほか、千葉アートネットワーク・
プロジェクト・千葉市美術館、WiCAN Document
2013、2014、96

神野真吾、中山節子、伊藤葉子、本多佐保
美、山本純ノ介、芸術教育による感性に働き
かけるESDの構築報告書、科研芸術教育によ
る感性に働きかけるESDの構築、2013、16

神野真吾ほか、千葉アートネットワーク・
プロジェクト・千葉市美術館、WiCAN Document
2012、2013、98

〔その他〕

特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

神野 真吾 (JINNO, Shingo)
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号：90431733

(2) 研究分担者

伊藤 葉子 (ITO, Yoko)
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号30282437

中山 節子 (NAKAYAMA, Setsuko)
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号50396264

山本 純ノ介 (YAMAMOTO, Junnosuke)
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号30302516

本多 佐保美 (HONDA, Sahomi)
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号90272294

岩田 美保 (IWATA, Miho)
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号00334160

貞廣 斎子 (SADAHIRO, Saiko)
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号80361400

加藤 修 (KATO, Osamu)
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号20302515